新潟の水辺だより Vol.60

●編集発行 特定非営利活動法人新潟水辺の会●発行日 2004年5月15日Vol.60

「信濃考流会」開催に寄せて

昨年の千曲川杵淵地区の見学会

長野県、新潟県の「水辺の会」が合同研修会を新潟市で開催するにあたり、今までの経緯を振り返ります。なお、長野が「合同研修会」、新潟が「千曲川信濃川考流会」という名称を使っていましたが、今回から両県をイメージする「信濃」を使い「信濃考流会」にしました。

長野の長田健氏が「ながの水辺の会」、「新潟水辺の会」、「黒部学会」（富山県）の３団体の交流・学習の場を持とうと提案されたのが91年でした。92年10月に２回目が戸隠高原で開催され、94年3月には咲花温泉に泊まり、阿賀野川舟下りや瓢湖・福島潟の観察会を楽しみました。その後、長野と新潟でやってゆこうと現在に至っています。

交流のはじまりで特に印象に残っているのは、両者で共催した93年4月24日の「水辺と生物」シンポジウムです。長野市の信濃教育会館に240人が集まり、瓜生喬氏の語りべ「水と民話」の心を捕らえる迫真のステージ、浜栄一氏の昆虫少年のように目を輝かせながら語った「水辺の昆虫採集罪悪論」、桜井善雄氏、金井格氏、長田健氏の発表や新潟からは大熊会長をはじめ、井上信夫氏や今回の発表者でもある本田清氏の報告など、大きなシンポジウムを開催したことのなかった新潟の会にとって、その後の活動への大きな刺激になりました。

翌日の現地研修会では全国から参加した57名が犀川・千曲川を歩き、コムラサキの生息地やサギの集団営巣地を観察しました。観察会では長野の会の特徴が遺憾なく発揮され、昆虫・植物・鳥類・地質・河川のスペシャリストがそれぞれ丁寧に解説されていたのが印象的でした。

近年では01年3月に飯綱高原「いこいの村アゼィリア飯綱」で、桜井善雄氏「川の生息環境保全とすみ場の生態学」、長田健氏「河川の生物調査におけるスキューバ潜水の効果」、河村雄司氏「河川への帰化植物の蔓延とアレチウリ対策」、新潟からは岡田真純さん「2000年運河の国ーのんびりかけ足旅家族ー」、栗原道平氏「信濃川ウォーターシャトルプロジェクトの概要」、大熊会長からは通船川の取り組みを例に新しい時代の公共工事の進め方についての発表が行われた。７時までに及ぶ熱心が討議が印象に残っています。

02年5月に秋山郷「萌木の里」雪国の森研究所で37名が参加。「流量が変動する川の本来の生態系について」をテーマとして、香野哲大氏「新しい河川維持流量のあり方を求めて」、桜井善雄氏 「川の多様な生育・生息環境はすべて流量変動の結果である」、長田健氏「川の中流部における流動変動がもたらす魚類の多様な生息地としてのたまり・ワンド」、森本利「新潟市堀割再生物語プロジェクト活動について」、風間善浩氏「2001年アジア湿地シンポジウムINペナン報告」が発表された。新潟の会の女性パワーに刺激され、懇親会もかなり盛り上がりました。

03年10月に千曲川杵渕地区「多自然型川づくり」の現地として、治水目的の護岸や水制などの視察を行い、戸倉上山田温泉にて、テーマ「水辺環境の創出」～野生生物のための水辺環境、人間のための水辺環境について～として基調講演、研究発表、活動発表が行われた。新潟からは石月升氏「信濃川最下流のナゴヤサナエの生態と人工護岸のあり方」、加藤功氏・松野直一氏「中ノ口川の水辺環境の再発見と行政・NPO・地元住民の協力について」の発表を行いました。

今回は開館したばかりの新潟市歴史博物館「みなとぴあ」を会場に、テーマ「越後平野の開発と残された生物達」として、桜井 善雄氏「すみ場の階層構造理論の応用」、松岡 保正氏「地域ビオトープネットワークと環境教育」、大熊 孝氏「越後平野の変遷」、本田 清氏「佐潟の今昔」、星島 卓美氏「まちの川、ドブ川・通船川が市民の川になりました」の発表が行われます。懇親会はみなさん期待のウォーターシャトルで旧交を暖めたいと思っています。

会の性格としては主に、新潟の会は活動が中心で、長野の会は研究が中心です。桜井会長が新潟水辺の会を紹介する新聞記事を目にした事から始まったこの交流は、互いの違いを魅力として認め、自分達の会のエネルギーにしているように感じられます。今後も互いに刺激しあい、すばらしい会になる事を願っています。

世話人　森本　利

REPORT 水辺レポート

水辺シンポジウム2003レポート

平成15年12月６日に「新潟発パートナーシップ型市民公共事業事始め」と題し、水辺シンポジウムが新潟市東地区公民館で行われました。当日は篠田昭新潟市長とコミュニティーケア活動支援センターの佐藤修氏をゲストにお呼びし、佐藤氏の基調講演や篠田市長・佐藤氏・大熊代表のディスカッション、水辺賞の贈呈式などが行われました。

「にいがた水辺賞」

今回は2003年8月に実施された第１回「水と緑ワイワイガヤガヤ寄ったかり」で活躍した新潟市立女池小学校が受賞しました。女池小学校の子供たちはビオネッシーという池でビオトープをつくり生き物について学んでいる活動に加え、全国「川の日」ワークショップでグランプリがとれそうなくらいユニークな発表が高い評価を得て、受賞に至りました。

女池小学校のビオネッシーチームの皆さん

「市民公共事業の現場報告」

・ 通船川草刈隊（横山 通世話人）

平成７年ごろから私一人で始めた通船川の川辺の植樹はこれまで、通船川・栗ノ木川の沿川各地に広がり、植えられた苗木もすくすく育っています。

平成15年10月11日には、「森守ワークショップ」で構想図を描いた、山ノ下閘門左岸の昔ニセアカシアの森があった場所で植樹が行われました。地域住民や水辺の会会員だけでなく行政の職員の方も大勢参加していただけました。

現場は土が固いため、重機を借りてきて穴を掘り、そこに植樹を行いました。

今後は、川舟「板合わせ」を利用するなどして、汗をかいていただいた人たちに楽しんでいただけるような仕組みをつくることがもとめられ、また、そのための資金繰りが課題となっています。

・ 中ノ口川水辺の名所づくり(松野 直一・加藤 功両世話人)

平成15年1月～3月にかけて、中ノ口川の堤防で、住民主体の利活用を目標とした「中ノ口川・小吉夢の水辺づくり」ワークショップが始まりました。平成15年4月20日には地元に「小吉水辺の会」が発足し、堤防の魅力付けをする「水辺の名所づくり」整備構想図の作成と、中ノ口川を再確認するためのカヌーなどのイベントがおこなわれました。

特に夏に行ったカヌーによる中ノ口川川下りは地域の人々に大反響で、来年もとの声が多数上がりました。また、加藤世話人が作成した、ワークショップの様子を編集したビデオ回覧板は新潟日報でも取り上げられ、話題となりました。

・阿賀野川流域子ども交流会（杉山 泰彦世話人）

平成15年8月初旬に、新潟県の阿賀野川流域連携事業の一環として子ども交流会が実施されました。この交流会は阿賀川・阿賀野川流域に住んでいる小学5・6年生を対象とし、阿賀野川の上流と下流の流域の水のつながりを体験する事を目的とした交流会でした。

阿賀野川流域連携事業は、今後、新潟県内で阿賀野川流域をフィールドとしている市民団体や企業、農家などが、お互いを支援しあえるような仕組みづくりを目標とした「阿賀野川流域ネットワーク」に取り組てを広げるいくことになります。

佐藤　修さん

「基調講演」

～みんなが楽しく汗をかき笑い語り合うコモンズのあるまちづくり～

コミュニティーケア活動支援センターの佐藤修氏にまちづくりについての基調講演を行っていただきました。

コモンズとは公（官）と私（民）の間の部分の共（地域社会）のことをいい、これらをそれぞれ言い換えると公は行政、私は企業または個人、共は自治体またはNPOと言い換えられるそうです。最近の社会はこの地域社会を基盤とした「共」の

水辺レポート

REPORT

水辺シンポジウム2003レポート（つづき）

部分が「公」や「私」に侵食されている状況であるとのことでした。

「まちづくり」とはいわばこの「共」の部分を取り戻す活動のことで、個々のつながりをより密にし、また、つながりの輪を広げることによって地域社会を構成していくことであるそうです。

特に「まちづくり」は地域住民主導で行われることが望ましく、「住民の住民による住民のため」のまちづくりが全国ではじまっています。

左から大熊代表、篠田市長、佐藤氏、進副代表

茨城県美野里町の例

文化センター建設を構想から住民主体で行い、住民による郷土資料の本づくりや市民劇団などへ住民の活動が波及していった。

コムケア物語

個々の活動をつなげることによって、誰もが気持ちよく過ごせるような社会づくりを目的とした「大きな福祉」を行うため、全国の市民活動の支えあいの輪づくり活動を「コムケア物語」といっている。

北九州市小倉北区

まちづくりトークライブから町を育てる仕組みの構築へ発展して行ったことが紹介された。

これらのまちづくりは現在、社会の仕組みが変わりつつあることを示し、今後、行政主体の住民参加型のまちづくりでなく、住民主動、行政がそれに参加する型のまちづくりが行われていくべきであるとのことでした。

これらのことから考えると、通船川での活動などは既に市民主体の活動であり、社会の最先端を行くまちづくり活動であるといえるのではないでしょうか。

「川と堀の鼎談」

篠田市長・佐藤氏・大熊代表によって「市民が参加できる堀割再生公共事業とは？」をテーマにディスカッションが行われました。

新潟市が市町村合併が目指す田園型政令指定都市において、市が大きくなるからこそ、命のつながり、人とのつながり、地域のつながりを大切にする事が重要になってることなど、今後の市町村のあり方に関する議論がなされました。

また、新潟の堀割の再生に関しては、行政だけで事業を起こしても実現は難しく、市民活動のみでも実現は難しいが、お互いが連携し、パートナーとして事業を進めていけるなら再生の可能性は高いのではないかという意見が出ました。特に、市民からは具体的は再生案が数多く出てきているので、最初に１箇所堀割を再生し、住民の意見を聞いたうえでその後の対応を決める「見試し」の手法が有効であるのではとのことでした。

堀割再生のように、市民の個々の活動や思いがつながり気運が高まったことに対して、行政が公共投資をできるような形を今後つくっていければということで談議はまとまりました。

市民のできる公用事業を発表

「市民公共事業ワークショップ」

佐藤氏の基調講演、談議をうけ、参加者全員が、いくつかのグループに分かれ、今年自分がやった、参加した市民公共事業、来年やりたい、やるべき市民公共事業について話し合いが行われました。

2003年に行った市民公共事業としては先にもあった通船川の植樹や堀割再生の活動から、家の前の掃除やゴミひろいまで様々な意見があげられ、2004年にやりたいこととしては、昨年度から行われている活動に参加する事や、身近な場所で楽しく活動をしたいという意見が数多くでました。

事務局　寺村　淳

会員参加で子どもや若者対象の「かわ塾」を始めましょう

いま「かわ塾」は、水辺の会の中心の主催事業で力を入れる最も急ぐべき大事なテーマだ。幸運にも加藤功世話人の０４年助成申請努力のおかげで、当会の「かわ塾」事業に(財)新潟県環境衛生研究所の基金助成、セブンーイレブンみどりの基金助成を受けることができた。本年の活動スケジュールに組み込んで実施することになるので多くの会員とご家族の参加を期待したい。いま必要なのは、子どもたちの川での「体験」、高齢者の持っている川の「情報」と川に関る「技」、それをつなぐ若者の「実践力」だ。川の魅力を取り戻すためにも「かわ塾」を進めたい。

環境再生の川づくりが始まっているが、大事なのはその環境再生と再生育成した環境保全への地域住民の参加や関わりの復活だ。でも一度切れた川と地域との関わりを取り戻すのは容易でない。漁や運搬、買い物にも使ったという小舟の姿も今は無く、かつての船頭師たちの活躍できる場所も少ない。先日の栗ノ木川桜祭での川舟「板合せ乗船体験」では230余名が参加し、20数回の操船で「俺も漕げる」と飛び入りした老船頭師も再発見した。

「かわ塾」は、①高齢者の川情報や知恵、技を伝えること、②子どもたちに川の魅力や楽しさ、厳しさを体験させること、③若者に川を楽しみながら舟や道具の技を体得してもらうこと、④子供たちや若者の中から川の魅力や楽しさを伝えるガイドを育てること、⑤そこから美しい川の再生に向けた道具や設備、環境、支援の仕組みを考え出すことをねらいとする。とりわけ、子どもたちや若者の参加を期待したい。子どもたちは公園や学校、家の近く以外では安全に遊べなくなっている。川の魅力以上に多くの知恵とハイテクを駆使したゲーム機が子どもたちを虜にしている。一方、川の大自然に抱かれながら遊びまくり、暮らしの中で川の生き物や舟の漕ぎ方を身に付けてしまったという元気老人の活躍する場が少ない。壮年は仕事に追われ、若者は近づきにくい川よりスポーツ公園を好む。これらをつなぐのはわれわれ会員だ。

川塾のキーワードは「子どもや若者が技や知恵をつなぐ」「使いながら本来の川に戻そう」である。フィールドは源流から海までの流域、潟湖、水路などで、１）川のようすの観察、２）投網体験３）川舟乗船と舟漕ぎ体験、４）川辺の植樹、５）草刈などの体験、６）水辺の食交流、７）体験や提案の発表、８）実践的学習から発表までの中からガイド登録、と８つのプログラムを企画している。塾参加受講料は、本年は助成金があるので無料として試行したい。春は、菅名岳源流登山が始まっている。当面、川塾には、①植樹、②川管理、③舟体験、④漁体験、⑤生き物調査、⑥水質調査、⑦川の情報調査、(川辺の交流、)水辺の発表会などのプログラムのある事業を「かわ塾講座」に位置づける。各事業参加者には川塾受講生として登録してもらうことにしたい。また子ども会や学校PTA、各団体に参加を呼びかけたい。近々、募集チラシをつくりお誘いするつもりだ。講師は豊富な世話人や会員などにお願いするのでヨロシク。

世話人・相楽　治

水辺レポート

REPORT

中ノ口川夢の水辺づくりワークショップ

平成14年度から県巻地域振興事務所より継続で受託しているＷＳ事業も今年度（平成16年）で終了となります。その間、”川を楽しむ”「小吉水辺の会」が結成され、平成15年度からは新たに県土木の「ふれあいの場づくり事業」が同一工区でＷＳ業務と平行して実施されるなど、これからは住民と行政の協働により将来に夢を持てる豊かな地域づくりの実現が期待されます。

平成１６年度は5回のＷＳを実施します。

第1回　4月22日（土）、今年度の活動方針づくりと年間スケジュールが検討され今年の活動内容が決定した。

第２回　5月22日（土）、中之口方式桃のオーナー制を勉強のため先進地の視察をする。長野県安曇野、バスで日帰りの予定。

第３回　6月13日（日）、堤防の草刈、県土木事業により盛土造成された法面の芝張りを住民参加で実施する。

第４回　７月19日（祝）、中ノ口川をカヌーで川下りをする。

今年は公民館の事業にも組み込まれおり小中学生の参加が見込まれる。川から眺めた自然の豊かさを実感してもらう。

第５回　9月26日（日）、まとめのＷＳをおこなう。

川辺の管理体制とその仕組みの確立、今後の活動の課題についてなど。

※　10月10(日）に「両郡橋、中ノ口川、電鉄シンポジウム」（仮称）の開催が決定しました。中之口村公民館と近隣の公民館が主催し「小吉水辺の会」は協賛で参画し、これまでのＷＳの成果を発表します。「新潟水辺の会」も協力してシンポジウムを盛り上げましょう。

文責　松野　直一

身近な水環境の全国一斉調査（6月6日（日）実施）

近年、河川など身近な水環境の保全や修復に関する市民の意識が高まり、全国各地で市民や学校により身近な河川などの水質調査が行われています。しかし、調査の方法や項目などは必ずしも統一されておらず、水質の測定制度も十分に保証されていませんでした。

調査方法は簡単なのでお気軽にご参加ください

そこで、統一的なマニュアルを作成、実施し、データベース化することが大事であると、みずとみどり研究会（東京都国分寺市）が呼び掛け、(財)河川環境管理財団と国土交通省が連携して、統一的な調査マニュアルに基づき全国の身近な水環境の水質を同一日（今年は6月6日）に一斉に調査することになり、当会としても積極的に参加することになりました。

得られた結果を分かり易い水環境マップとして表現することにより、全国の水環境の状況が一目で分かり、身の回りの環境に関する市民の理解と関心がさらに高まることが期待されます。

今回ネットワークに参加する団体総数は437団体(個人含む)、調査地点数約3000地点が予定されています。

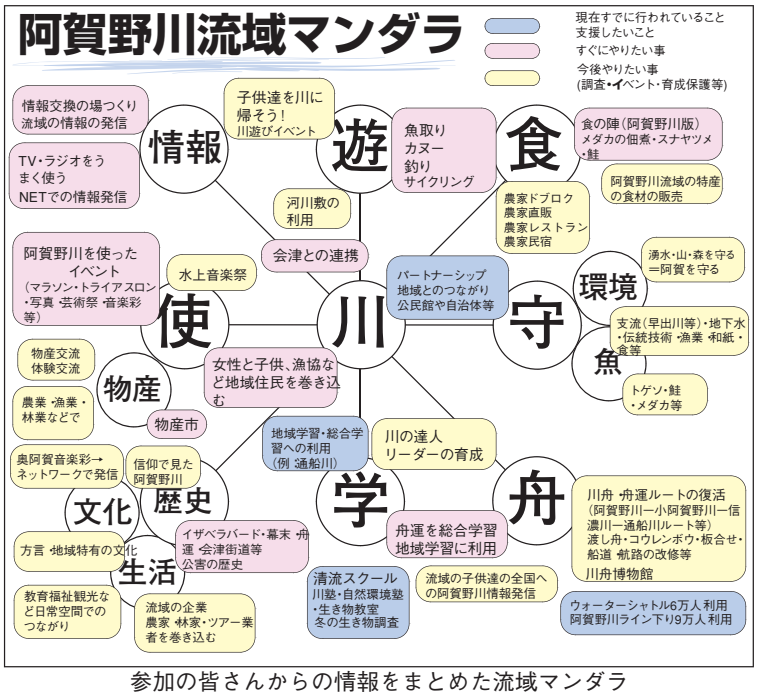
今回の全国的調査項目は、気温、水温、COD（化学的酸素要求量）の三点ですが、こしじ水と緑の会様の自然保護助成金申請が認められたことにより、新潟水辺の会ではねっとわーく福島潟、にいつエコサポーターズ等の団体とネットワークを組み調査にあたります。この他に、ｐＨ（水素イオン濃度）、NO3-N（硝酸）、PO4-P（リン酸）、河川の不法投棄なども調査し、新潟市周辺の水環境の実態結果を8月に新潟で行われる「水環境フェアin2004新潟」の分科会での発表を予定しています。

水辺の会の皆様、6月6日ボランティアでの参加をお待ちしています。

世話人　加藤 功

REPORT 水辺レポート

阿賀野川流域ネットワーク



参加の皆さんからの情報をまとめた流域マンダラ

2月14日、新潟県（総合政策部地域政策課）の主催で阿賀野川流域ネットワーク交流会が新津市内で14団体31名の参加で実施されました。

当会ではこの交流会の企画・運営の委託を受けています。

この交流会は流域の団体や企業等が交流・連携を通じながら、それぞれの活動に広げていくことで流域の地域づくりにむけた緩やかなネットワークづくりを目的としています。

当日は第一回目ということもあり、参加団体や企業の活動自己紹介を行い、その後水に関係する様々な事柄を切り口に流域の宝物や取り組んでいる活動、これからやってみたいことなどについて情報交換をするワークショップを行いました。

平成16年度も引き続き交流会は予定され、第2回目は５月29日に新津市内で実施予定です。

直接の関係ではないですが、福島県南会津林業事務所からも6月27日の下郷町での森づくり体験イベントに新潟からも来てほしいと声がけいただいています。

今後はネットワーク型の活動に取り組みながらネットワーク自体が自立し継続できる仕組みづくりがこれからの課題です。

たくさんの団体からご参加いただき、楽しく息の長い活動にしたいと願っています。

杉山　泰彦

イベント情報

5/15-16　信濃考流会（新潟市）
5/22　中ノ口川WS先進事例視察
5/22-23　新潟砂丘の放水路群見学会
5/29　阿賀野川流域ネットワーク交流会（新津市）
5/30　新潟みなとトンネル両岸交流イベント（新潟市）
6/6　身近な水質一斉調査
6/6　新潟市環境フェア（新潟市）
6/13　中ノ口川草刈りWS・川塾（中之口村）
6/20　通船川森づくりWS
6/27　阿賀野川源流森づくり体験（福島県下郷町）
7/10-11　全国川の日WS（東京）
7/17　通常総会
7/19　中ノ口川川下りWS・川塾
7/24　にいがた夢海岸フェスティバル2004（新潟市）
8/4-7　全国水環境フェア市民活動紹介コーナー展示、水質分科会運営（新潟市）
8/8　早出川清流スクール・川塾（五泉トゲソを守る会共催）
8/21　萬代橋誕生祭（新潟市）
8/22　信濃川Eボート大会・川塾（新潟市）
8/29　水と緑のワークショップ（新潟市）
9/4　通船川クリーン作戦・川塾
9/17-19　ソウル清渓川ツアー
9/x　大熊河川研究所完成予定
10/23-24　大池川講座・川塾（小出町）
12/4　にいがた連携公開講座＆水辺シンポジウム+望年会・川塾

水辺レポート

REPORT

櫓漕ぎ舟歌幻想

昨年、堀割再生物語プロジェクト実行委員会と共に琵琶湖に連なる近江八幡に行き、始めて櫓漕ぎの和船に乗った。

近江八幡の和船はテレビの藤田まことの『剣客商売』で見ていたこともあって是非あの和船に乗って見たいという想いからツアーに参加した。

櫓漕ぎの和船の優雅さとのどかさは人の手によってすべてが作られ、動かされていた江戸時代を感じさせてくれる数少ないものの一つである。優雅であるというのは乗っているだけの客ばかりではなく櫓をこぐ船頭も同じようにのどかなものだった。そして８人乗りのその和船は西湖の静水の上を櫓のしな撓りの音をさせながら滑るように進んでいった。私は船頭に何か歌を歌ってくれないかと頼んだが歌う歌がないせいなのかその願いは却下された。

新潟に帰ってから日本の舟歌を調べ始めた。現在各地に伝わる舟歌は民謡しかないが案外船頭が歌う舟歌は少ないことがわかった。というより歌う機会を奪われた舟歌は歴史の彼方に消えていったのだろう。船頭という職業は大声で歌いながら仕事をこなすものではなくなって久しいのである。数少ない1人で歌える舟歌を紹介する。

音戸の舟歌
えんや～れ
船頭かわい～や　音戸の瀬戸でよ～
一丈五尺のや～れの～　櫓がし～わるよ～
えんや～れ
ここは音戸の瀬戸～　清盛塚のよ～
岩に渦潮や～れの～　ドンと打ち当たるよ～
えんや～れ
泣いてくれるな～　出船の時はよ～
沖で櫓櫂のや～れの～　手がし～ぶるよ～

ガーシュインの『サマータイム』にも劣らぬ見事な韻と曲調である。不意に『通船川舟歌』が欲しいと思った。そして通船川に櫓漕ぎの和船を就航させたいと考えた。

それにしても大変な苦労をして『板合わせ』を復元した。それは確かに新潟の原風景に欠かせないものであることは承知している。

しかし『板合わせ』はいわゆる田舟であり人を乗せる舟ではなかったし、板合わせを操る人の歌があることを聞いたことがない。多分、新潟の先人たちは黙々と米と野菜を板合わせで運んでいただけだったのだろう。『板合わせ』は新潟市近郊の歴史を物語るものではあっても人と川の共生を象徴するインパクトに欠ける。

通船川の持続的な再生には新たな道具立てが必要である。それが通船川の再生に向けて人々の心を鼓舞する『通船川舟歌』であり、その志を伝える伝承者としての船頭の復活である。舟は船頭の歌声が聞こえる小さな和船のほうがいい。

川を清掃・管理する船外機付和船も必要でありまた亀田郷循環日本型ナローボートも必要だが志を再生産し、伝承するシステムはその実現がより難しい。平成の民謡『通船川舟歌』に多くの知恵を撚り合わせ、ゆったりとした曲調の中に街と川の共生を暗喩にして実現させたい。それが可能なら舟に乗ってもらい、船頭の歌を聞いてもらうことで通船川再生の意味と共感を感じ取ってもらえるだろう。

櫓漕ぎの和船は近江八幡から中古品を購入し、とりあえず通船川、栗の木川に浮かべ櫓漕ぎの練習を始めたい。また音戸の舟歌などをうたって喉を鍛えておこう。

そこで通船川・栗の木川ルネッサンスでは『通船川舟歌』創作委員会の立ち上げと櫓漕ぎ和船購入のための基金を創設する。基金の総額は運送費込み50万程度と考えている。私の想いが幻に終わるのか！それとも新たな展開が可能なのか？心とお金の余裕のある方々の力強い支援をお願いしたい。

NPO法人新潟水辺の会　会員
通船川・栗の木川ルネッサンス世話人
横山　通

振込銀行　第四銀行　木戸支店
口座種別　普通、１３２８２７５
名義人　　通栗ルネッサンス、山田淑子
和船購入基金としてと、記入し入金してください。

萬代橋の重要文化財指定の答申に思う

萬代橋の重要文化財指定が、2004年4月16日文化審議会から文部科学大臣に答申され、この5月中にも官報告示される。

建造物関係の重要文化財は2004年3月現在で全国2260件あるが、明治以降の建造物では205件に過ぎず、そのうち橋梁は10件である。萬代橋の重要文化財指定はその11番目にあたり、自動車が通る現役の橋としては3番目、何万台も交通量のある橋としては日本橋（1999年指定）に次いで2番目となる。

萬代橋を楽しそうに歩く子どもたち
（撮影：渡辺利夫）

この萬代橋重要文化財指定に関しては、「新潟の水辺だより」Vol.57（2002年12月）に、佐藤誠君（現新潟大学大学院修士2年、当時学部4年）による「万代橋重要文化財化について―課題点の解決に向けた私案―」という記事が載っている。その課題点とは、萬代橋の高欄の高さが約85cmしかなく、1998年に建設省道路局長通達で示された「歩行者の転落防止を目的として設置する柵の路面から柵面の上端までの高さは110cmを標準とする。」という防護柵設置基準に適合していないことであった。佐藤君は、文化財はAuthenticity（本来の姿）が大切なので、「現況のままで重文指定を受ける」ことを提案していた。

この高欄の高さについては、その後新潟日報にも報道され、多くの投書が寄せられ、また市民団体からも国土交通省新潟国道事務所に多くの陳情がなされた。これらを要約すれば、現在の高欄でも通行中に転落した者はおらず、子供でも橋の上から景色を楽しむことができ（写真参照）、アーチの頂点の薄さと高欄の高さがほぼ同じで景観的に優れていることから、現状を維持することにあった。2003年11月4日、篠田　昭・新潟市長は、これらの要望を取りまとめる形で茅野　牧夫・新潟国道事務所長に、「市民、まちづくり団体、有識者からも万代橋の高欄を嵩上げしないで現在のまま後世に伝えてほしい、現在の橋の景観を保全してほしい、という声があがっています。このことから新潟市としては、現在の万代橋の美しい姿を損なうことなく、歩行者や自転車が安全に通行できるようご検討いただき、重要文化財として指定を受けられることをお願いいたします。」という要望書を提出したのであった。

新潟国道事務所はこれらの要望を受け、2003年11月19日「万代橋７５周年記念事業」を発表した。この事業では、「１．万代橋本体については、現在の美しい姿を損なうことなく後世に伝える。　２．照明灯等については、極力建設当初の姿を復元する。　３．歩行者、自転車の通行の安全性及び冬期の通行しやすさに配慮する。」の3点を基本として、高欄は当面大規模な修繕は行わず、通行帯は歩行者を高欄側、自転車を車道側に明確に分離することにした。このことは、日本全国の道路橋のほとんどが通達によって高欄の嵩上げがなされ、Authenticityを失い重要文化財にできない状況にあることから考えて、歴史に残る大英断であったと言える。この通行帯工事はすでに上流側の歩道で完成しており、先日2時間ほど観察していたが、ほぼ歩行者と自転車は分離されており、安全性は確保されていると判断できた。

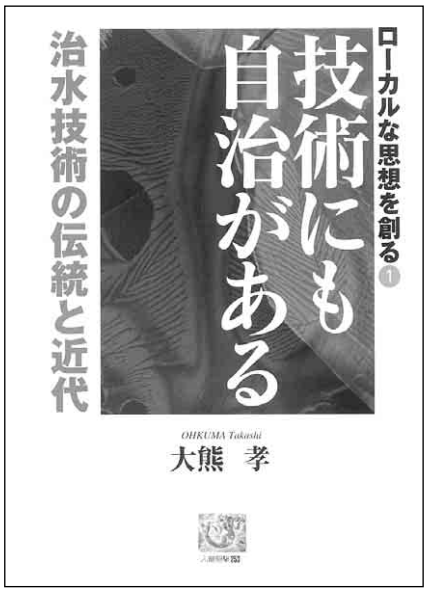
街灯及び橋側灯（側面の航路標）も建設当初の姿に完全に復元されることになっている。この橋側灯10基のうち5基を市民の手で建設し寄贈しようという募金活動がこの４月から始まっている。この件については、予定の字数を超過したので、次回にその意義などを含め報告したい。

大熊　孝（新潟水辺の会代表）

書籍紹介

BOOK

「技術にも自治がある－治水技術の伝統と近代－」紹介



大熊孝著
「技術にも自治がある－治水技術の伝統と近代－」（農山漁村文化協会、2004年２月28日発行、293頁、2300円）
『内山節（哲学）、鬼頭秀一（環境倫理学）と大熊孝（河川工学）でつくる三人委員会の議論の集約として出されるシリーズ『ローカルな思想をつくる』の第１弾。（著者紹介文）

書評
「技術にも自治がある」を読んで

石　月　　升

長い間河川環境の無機質化を促進する立場にいた者の一人として、教えられるところの多い著作であった。これを逐一考察し評価する能力は勿論、時間もない。散文的に思い浮かべた事柄を記しておきたい。

1.岩塚小学校校歌

洪水の悲惨さを伝える口伝や著作は多いが、このような「洪水賛歌」はほとんど見当たらない。が、足尾銅山鉱毒事件に身を投じた義人・田中正造が晩年の著作「治水論」の中で次にように述べている「-----天与の肥土を歓迎する農民漁民はむしろ洪水の至るを待てり」

岩塚小学校校歌は、田中正造の治水論にも匹敵する「洪水賛歌」といえるかもしれない。

2.ダムと堆砂

あるダムの講習会で「ダム下流の河床低下にどう対応するのか」と言ったら「それは公害だ」と一蹴されてしまった。

そんな空気の中で多目的ダムは登場した。

3.つつみ

堤は「つつみ」と読み「包み」に通じ「とどこおる」意味を持つ（小学館・日本国語大辞典、諸橋轍次・大漢和辞典）ことから、ため池（用水池）、大池、沼などを指す言葉として全国各地で使われている。

堤防というのは、元来「万里の長城とでもたとうべき連続堤防」（高橋裕「国土の変貌と水害」）のようなものではなく、水を滞りさせたり集落を包み込むような、小規模な土堤を意味した言葉だったのではなかろうか。

4.分かりにくいこと

この本のなかで最も難解だったのは図6-7「堤防の各名称」である。原因は縦と横の比率が反対になっていることにある。紙面を倹約しないでもう少し川の上下流を長く描いてほしかった。

つぎに分かりにくかったのは、やっぱり本書の主題の「技術の自治」である。

江戸時代、領主が行った河川工事を「御普請」といい、百姓が自力で行った堤川除工事などを「自普請」と呼んだ。封建領主が財政難のため百姓に押し付けた工事と一緒にされたくはないが「２１世紀の自普請」というのはどうだ。と、一人悦に入っているのだが。

はじめまして

4月から水辺の会の事務局スタッフとして働くことになりました、寺村淳といいます。水辺の会方式で自己紹介をすると、私は愛知県の矢作川の水を産湯に、滋賀県の琵琶湖の水で育ちました。琵琶湖は新潟の佐潟同様ラムサール条約に指定されていますが、外来種やレジャースポーツによる影響をはじめとした環境の変化によって劇的に変わってしまいました。しかし、まだ各所に自然豊かな水辺が残っています。特に琵琶湖の北端と八幡堀、琵琶湖博物館がお勧めです。皆様も機会がありましたら是非訪れてみて下さい。あと、琵琶湖にそそぐ川を見て下さい。季節にもよりますが、琵琶湖に比べとてもきれいです。

自己紹介というより、琵琶湖の紹介になってしまいましたが、その琵琶湖の水で育ったためか、「川」というものに興味を持ち、また、川に関る「人」に興味を持つようになりました。そのため、新潟水辺の会で様々なことを学ばせていただければと考えています。

今後は事務局スタッフとして、皆様が楽しく活動できるような環境作りを行なっていきたいと思っています。とはいうものの、右も左もわからない若輩者のため、至らない点はたくさんあると思います。そのため、皆様におおいにお力をお貸しいただきたいと思います。よろしくお願いします。

事務局は現在、浅井税理士事務所の一室をお借りして仮事務所を立ち上げました。秋には赤塚にできる大熊代表の研究所に移転する予定です。

事務局　寺村　淳

事務局より

異動などで連絡先が変更になった方は事務局までお知らせください。

4月中旬からインターネット上でウィルス被害が拡大しています。心当たりのないアドレスからのメールは要注意です。また、その様なメールは開かないことをお勧めします。ワクチンソフトの更新などお忘れなく。

入会申込書

年　月

フリガナ 氏　名		男・女 歳
特技や 水辺への想い		メールアドレス
住　所	〒 (　　) ―	
職　業		
勤務先	〒 (　　) ―	

注）紙面の都合上、縮小しています。
250%程度拡大コピーをしてご使用下さい。

第4回新潟水辺の会海外ツアー

「ソウル、清渓川の旅」募集中！

今、道路を潰し川の復元事業を行っている韓国ソウル市内「清渓川」（チョンゲチョン）を視察します。現地では担当技術者の説明を予定しています。

期間：平成16年9月17日(金)～19日(日)2泊3日
費用：一人9万円程度
募集人員：25名　　申込締切り：７月末
主催：ＮＰＯ法人新潟水辺の会
共催：堀割再生物語プロジェクト実行委員会

日程（予定）
17日(金)新潟空港9:35発、ソウル仁川空港11:50着、「清渓川」復元事業視察
9月18日(土)　水辺視察及びソウル市内観光
9月19日(日)　自由行動、仁川空港13:30発、新潟空港15:30着

問合せ先：森本090-1613-1879、
toorum@rose.ocn.ne.jp

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。

ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。

自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。

今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年：1987年10月1日■目的：水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。■代表者：代表 大熊孝（新潟大学工学部教授）■会員数：個人205名・法人12団体(2004年5月現在）■活動：水辺シンポジウムの開催/水辺ウォッチング/会報「新潟の水辺だより」の発行/「水辺環境整備に関する学習会/長野県富山県の水辺グループとの交流会/通船川、佐潟の調査・研究etc.

■年会費：個人会員一口1,000円を2口以上、賛助会員（法人など）一口5,000円を2口以上

●発行：　特定非営利活動法人　新潟水辺の会
●事務局：〒950-0024 新潟市河渡2-2-8
Phone　025-270-9207
Fax　025-270-9207
e-mail：　info@niigata-mizubenokai.or.jp
ホームページ
http://www.niigata-mizubenokai.or.jp/